

氏 名	辻 玲子
学 位 の 種 類	博士（看護学）
学 位 記 番 号	第34号
学位授与年月日	令和3年3月19日
学位授与の条件	学位規程第3条第3項該当
学 位 論 文	高齢者虐待の予兆を察知し虐待に至らしめない外来看護支援モデルの構築
論文審査委員	主査 桑名 佳代子 副査 大熊 恵子，武田 和久

論文の要旨

【目的】

本研究の目的は、外来看護師が高齢者虐待の予兆を察知し、虐待に至らしめない外来看護支援モデルを構築することである。

【方法】

第1段階：スノーボール・サンプリングで協力の得られた、病院や診療所の外来（小児科と産科は除く）で働く看護師5名に、高齢者虐待に関連する事例における関わりのプロセスをインタビューし、10事例の実践例を複線径路等至性モデルで整理し、事例の帰結、高齢者虐待の予兆と予兆察知を分析して、統合した。第2段階：老年看護学と高齢者虐待の研究者、及び外来看護の実践者7名による専門家会議を組織し、「高齢者虐待の予兆を察知し虐待に至らしめない外来看護支援モデル案」について、目的・目標及び、第1段階で得られた結果である予兆及び予兆の例示を提示して、外来看護支援モデル案の基本的考え方及び高齢者虐待の予兆の信用可能性について専門家の意見を得た。第3段階：専門家会議の意見を踏まえ、高齢者虐待の予兆を修正し、第1段階の10事例のうち9事例の実践を整理した複線径路等至性モデルを用いて外来看護師の予兆察知後のアプローチを分析し、さらに文献による予兆察知後のアプローチの追加を行って、予兆察知後の支援を作成した。予兆と外来看護支援の関連を分析し、高齢者虐待に至らしめない外来看護支援の構造図を作成した。

本研究は、宮城大学研究倫理専門委員会の承認（第1段階；宮城大第1030号，2017年11月29日。第2段階；宮城大第291号，2019年6月27日）を得て実施した。

【結果】

外来看護師が察知する高齢者虐待の予兆は、高齢者から察知した【なかなか改善に向かわない身体所見や症状】，【高齢者が介護者に依存する関係性】，介護者から察知した【介護者の介護の意欲低下や脆弱な介護力】，【介護者の精神的余裕を奪う経済的困窮】，【攻撃性が高い傾向の介護者】，【依存し合う様子の家族集団】の6つであった。高齢者虐待に至らしめない外来看護支援は，[通院継続の支援]，[高齢者の身体症状改善の支援]，[高齢者を擁護するための支援]，[介護者の介護力向上の支援]，[介護者の健康ニーズへの支援]，[家族集団の課題を踏まえた介護体制への支援]，[他の機関との連携による支援]の7つであった。これらの関連から「高齢者虐待の予兆を察知し虐待に至らしめない外来看護支援モデル」を構築した。本モデルの目的は，「通院している高齢者の家庭生活に潜む高齢者虐待の目を摘むために，高齢者虐待の予兆を捉え，予防も含む看護支援を提供し，高齢者虐待に至らしめないようにすること」であり，使用する場と対象は，高齢者が来院する病院の外来や診療所の看護師である。その内容は，高齢者虐待の予兆を察知し虐待に至らしめない外来看護支援の構造図と高齢者虐待の6つの予兆とその例示，高齢者虐待に至

らしめない7つの外来看護支援である。

【結論】

本外来看護支援モデルは、外来看護師が、外来通院する高齢者の本来の受診目的に対応しつつ、高齢者の家庭生活に潜む、高齢者虐待疑いになりかねない“予兆”を看護師の視点からとらえ、虐待に至らしめない予防的な看護支援を示すものとなった。また、本外来看護支援モデルは、社会的弱者である要介護高齢者の人権を擁護する基本的な老年看護だけでなく、高齢者虐待の要因となりうる介護力や介護意欲及び健康問題など、介護者側の個別ニーズへの支援や家族集団が有する課題に対する家族支援をも含むものであった。今後、本外来看護支援モデルを検証し精練させていき、臨床経験に合わせた本モデルの内容の享受により、実践への活用や外来看護師への研修ツールとしての活用が可能である。

キーワード：高齢者虐待、予兆、外来看護、予防、看護支援モデル

審査結果の要旨

本学位論文の目的は、外来看護師が高齢者虐待の予兆を察知し、虐待に至らしめない外来看護モデルを構築することである。本研究は、3段階で行った。第1段階は、スノーボール・サンプリングで協力の得られた、病院や診療所の外来（小児科と産科は除く）で働く看護師5名に、高齢者虐待に関連する事例での関わりのプロセスをインタビューし、10事例の実践例を複線径路等至性モデル(Trajectory and Equifinality Model; 以下 TEM とする)で整理して統合し、事例の帰結、高齢者虐待の予兆と予兆察知を明らかにした。その結果、「虐待に至らなかった」、「注意深く経過を見ている」、「虐待に至ってしまった」の3つの帰結が示され、「高齢者虐待の予兆」は、【なかなか改善に向かわない身体所見や症状】、【高齢者が介護者に依存する関係性】、【経済的問題から生じる介護者のストレス】、【介護者の介護への意欲や介護力への看護師の不安】、【地域で孤立している高齢者と介護者の暮らしの様子】、【集団行動する家族への違和感】の6つに集約された。第2段階は、老年看護学と高齢者虐待の研究者、および外来看護の実践者7名による専門家会議を組織し、「高齢者虐待の予兆を察知し虐待に至らしめない外来看護支援モデル案」として、外来看護の目的・目標および、第1段階で得られた結果である予兆を提示して、外来看護支援モデル案の基本的考え方および高齢者虐待の予兆の信用可能性について専門家の意見を聴取した。第3段階は、専門家会議の意見を踏まえ、高齢者虐待の予兆を修正し、第1段階の10事例のうち9事例の実践を整理した TEM を用いて外来看護師の予兆察知後のアプローチを分析し、さらに文献によるアプローチの追加を行って、予兆察知後の看護支援を作成した。これらの検討の結果、高齢者虐待の予兆は、高齢者から察知した【なかなか改善に向かわない身体所見や症状】、【高齢者が介護者に依存する関係性】、介護者から察知した【介護者の介護の意欲低下や脆弱な介護力】、【介護者の精神的余裕を奪う経済的困窮】、【攻撃性が強い傾向の介護者】、【依存し合う様子の家族集団】の6つであり、高齢者虐待に至らしめない外来看護支援は、[通院継続の支援]、[高齢者の身体症状改善の支援]、[高齢者を擁護するための支援]、[介護者の介護力向上の支援]、[介護者の健康ニーズへの支援]、[家族集団の課題を踏まえた介護体制への支援]、[他の機関との連携による支援]の7つであった。最終的に、外来看護支援モデルの目的および予兆察知のプロセスと予兆の構造、高齢者虐待に至らしめない外来看護支援の構造を図示して「高齢者虐待の予兆を察知し虐待に至らしめない外来看護支援モデル」を構築した。

本研究は、看護師が外来看護を展開する中で、高齢患者が受診する主目的である健康問題を入口にして、高齢者と家族の心身の状況や家族関係を直感的に察知し、高齢者の家庭生活に潜む、高齢者虐待疑いになりかねない予兆をとらえ、予防的なかわり方を行うための外来看護支援を構築した新規性があり、看護師が無意識に行っている高齢者虐待の予兆察知をインタビューによって聞き出し、その実践例について TEM を用いて分析した点に独創性が認められる。また今後、本外来看護支援モデルを検証し洗練させていくことで、高齢者虐待事例に遭遇したことがない外来看護師に対して、高齢者虐待の予兆を察知するための高齢者と介護者に対する観察力を養う研修や察知後に予防的な看護支援を実践するための研修等に活用可能性があり、発

展性がある研究と判断した。さらに、世界的に多くの国が急速に高齢化し高齢者虐待の件数の増加が予測されていることから、本研究の外来看護支援の知見は国際的にも意義があると認められる。審査委員はこれらの点を高く評価した。

この学位論文について遠隔による審査を行い、以下のような指摘がなされた。①高齢者虐待の予兆、疑い、サインの用語の整理、②TEM図の示し方（字体）、③第2段階の参加者の概要説明、④第3段階の結果説明の流れ、⑤本文に挿入の図表が不適切であること、⑥第3段階の考察を深める点、⑦外来看護支援の構造図の適切性、⑧外来看護支援モデルの対象者に合わせた使用方法、⑨本研究の限界と今後の課題への追記、⑩結論・要旨の記載の明確化、などであった。その後、上記の指摘事項についての論文修正が確認された。

本学位論文は、自治体等で従来から使用されている「高齢者虐待の早期発見チェックリスト」等とは異なり、看護師が外来通院する高齢者と介護者の様子を観察し、高齢者虐待の予兆を察知して外来看護支援につなげ、虐待を予防する外来支援モデルを構築したものであり、老年看護学と外来看護の知識体系に新たな知見を与える新規性、独創性を有しており、家庭内における高齢者虐待の予防への貢献性、発展性が期待できる。また、国際的にも意義のある研究である。

よって、審査委員会は、博士（看護学）の学位を授与するにふさわしいものであることを認めた。